解説　『ションヤンの酒家（みせ）』

2019 年４月８日(月)　日中友好協会湘南支部　映画鑑賞会

2002 年 5 月制作：中国電影集団公司（日本公開 2005 年 3 月）
監督：霍建起（フォ・ジェンチイ）
原作：池莉（チ・リ）『生活秀』（2001 年）
脚本：思蕪（スーウゥ）
キャスト：陶紅（タオ・ホン）陶澤如（タオ・ザァル）藩粤明（ハン・オゥミン）
第 6 回金鶏賞最優秀脚本賞、最優秀主演女優賞、第 22 回上海国際映画祭最優秀女優賞受賞作品
上映時間：106 分

［あらすじ］

急速な都市開発が進行中の古都、重慶。その一角の屋台街にションヤンの酒家はあった。売り物は美味しい酒と名物の鴨の首。そして美人のションヤンの笑顔。しかしお店の繁盛とは裏腹に彼女はたくさんの悩みを抱えている。上手くいっていない兄夫婦の〝家庭崩壊〟、薬物に頼ってしまった弟、新しい妻と暮らす父親、人の手に渡ってしまった家。それらすべてがションヤンの肩にかかってくる。彼女に惚れて通いつめる男との仲がどうなるのかー。しかし、ションヤンはめげない。強い意志で解決法を見出し、乗り越えていくー。幸せになりたいと願いながら。(DVD の説明より)

［解説］

この映画は 2004 年に日本でも公開され大ヒットした『山の郵便配達』の霍建起(フォ・ジェンチィ)監督の作品である。

この映画は前作と同様に懸命に働く庶民の生活を描いている。だが作品の舞台はだいぶ違う。かたや棚田が拡がる牧歌的な農村であった。こちらは大都会・重慶の裏町である。原作者である池莉(チ・リ)が付けたもともとの小説のタイトルは「生活秀」だった。〝秀〟は、英語の〝SHOW〟の当て字になっており、様々な登場人物のさまざまな生活を意味している。

もちろん主人公は〝あらすじ〟に書かれているように屋台の経営者であるションヤンである。彼女を軸にして物語は展開する。中国のどこに街にでもある屋台、そこにやってくるお客。夜のとばりの中で生き生きと遣り取りされるセリフ。

ションヤンを演じた陶紅（タオ・ホン）は眼が大きく、情感あふれる魅力的な女性だ。一途なところと投げやりなところが入り混じった性格。熱心に通ってくる男との関係がどう展開するのか、この映画のひとつの見どころになっている。それにしても主人公のションヤンは強い女性である。

毛沢東は「中華の女性は天の半分を支える」と言った。中国の女性は強い。だがションヤンの強さの背景には原作者の原体験がある。原作者・池莉は〝知青〟すなわち60年代中期から70年代中期の文革期に農村に派遣（下放）された〝知識青年〟として徹底的に鍛えられた。ションヤンは〝知青〟出身として設定されていないが、原作者によりその強さを与えられたように思える。監督も〝知青〟出身だ。

映画の中でションヤンの屋台は重慶の吉慶街にあることになっている。しかし吉慶街という街は重慶にはない。吉慶街は、湖北省は武漢の漢口側にある街である。武漢在住の原作者がわが住む町を舞台にしたのだ。因みに武漢は重慶とともに中国革命史や日中関係を知る上で重要な歴史ある都市である。辛亥革命の発端となった武昌蜂起や日本軍の漢口作戦の舞台となったところとして知られている。

だが監督は、都市の近代化がより急速に進められている重慶の方が古い街とのコントラストがよりはっきりするとして重慶を選んだのだろう。確かに重慶は軌道鉄道が縦横に走り、長江を跨ぐロープウェイが架けられているなどより街全体の変化が激しく、主人公の生活の場である屋台街との対比を浮きたたせる効果がある。都市開発や急激な社会の変化に翻弄される庶民の悲喜こもごも、これがこの映画のもうひとつの見どころになっている。

最近の中国映画は、中国映画評論の第一人者である石子順氏も述べているように大作・商業主義が主流となり、庶民の哀歌を描いた作品が減ってきている。映画が産業として競争にさらされていること、また世代交代が進み若い人たちが求める作品の傾向が変わってきていることから、こうした変化は致し方のないことである。こうした状況を考えるとこの作品は中国映画のオールドファンにはとても貴重と言える。

なお霍建起監督は、この映画の後、『故郷の香り』という作品を制作している。これはノーベル賞作家・莫言の『白狗秋千架（白い犬とブランコ）』を原作としており、日本でも2005年に公開された。かなわなかった初恋から10年、再会した二人のせつない運命を描く感動の物語で、本映画会でも追って上映できればと考えている。ご期待いただきたい。

参考資料：池莉『ションヤンの酒家』市川宏・久米井敦子訳（小学館文庫）
田畑佐和子「池莉の文学」（新しい中国文学５池莉『初恋』（早大出版会）

（岡崎雄兒）